

1年半 8カ所転々

報わぬ国 負担増の先に

第3部 療養不安

ような状態になった。昨年7月、妻は脳梗塞になり、救急病院に入った。それが、行き場を求めて苦悩する生活の始まりだ。救急病院では1週間ほどで「治療が終わったので」と退院を求められた。妻は体力が落ちてトイレや風呂に自力で行けなくなり、自宅での介護は難しい。夫は妻の受け入れ先を探した。

この1年半、認知症の妻(80)はのべ8カ所の病院や介護施設を転々としてきた。富山市に住む夫婦は妻の受け入れ先がなかなかなくて、困り果てている。それまでは夫(81)が自宅

どこも入居待ち

しかし、手厚い介護を受けられる特別養護老人ホーム(特養)は、富山県内で2千人以上の入居待ちがいる。リハビリをする介護老人保健施設(老健)や長く入れる療養型病院などもまったが、「その症状では、うちではみきれません」などと断られた。

介護施設に短期間入るショートステイを使った後、知人の紹介でようやく老健に入った。安心したのもつかの間、わずか1週間ほどで電話がかかってきた。「奥さんの症状ではお世



81歳の夫は認知症の妻の受け入れ先が見つからず、苦労した。妻は自宅にいたとき、症状が進むのを抑えるために写経をしていたという。富山市

興奮・徘徊… 施設「みきれない」

認知症

を起して病院に運ばれ、治療後に戻ろうとしたら、「うちではもう面倒をみられない」と拒まれた。妻はいま、一般病院の精神科に戻っている。日中は車いすで過ごし、食事はおかげで、オムツを使う。

61歳で入院

熊本市の男性(66)は9年前、若年性認知症と診断された。公務員だったが、仕事の段取りをつけるのが難しくなり、退職せざるを得なかった。

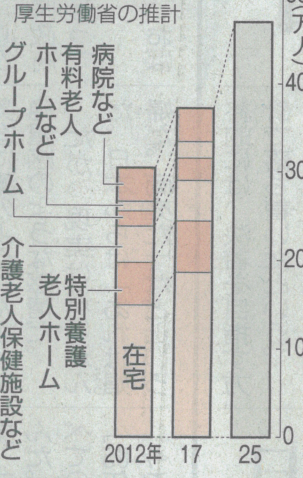
妻(62)が自宅で世話をしていた。徐々に症状が進み、大通りの赤信号を渡ったり、自転車に乗って20、30分先で発見されたり。力は強いので、妻が行動を抑えるのは難しかった。

かかりつけの医師らに勧められ、男性は61歳のときに精神科病院に入った。妻は「命の危険があったし、わたしが24時間見守るのは無理だった」という。

入院後も、院内を歩き回ったりトイレに閉じこもったりした。職員が3人がかりで風呂に入れることもあったという。

入院から2年後、病院の勧めもあって特養3カ所に

認知症の高齢者は増え続け、その半数は施設にいる



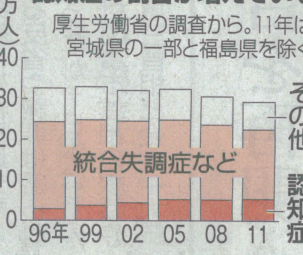
厚生労働省の推計。介護保険サービスを使っている認知症高齢者のうち、日常生活に支障をきたす症状などがある人の数

主な施設	施設数	利用者数(人)
特別養護老人ホーム(特養) 常に介護が必要で、家庭での生活が困難な高齢者らが入所する	7865	51万6800
介護老人保健施設(老健) 介護が必要な高齢者らが、リハビリなどをして、自宅への復帰を目指す	3994	34万9900
グループホーム 認知症の人が、介護を受けながら少人数で共同生活をする	1万2124	17万6900
有料老人ホーム 食事や生活支援つきの高齢者住宅。約4割の施設は介護サービスがつく	8499	34万9975
精神科病院 認知症の人は興奮や幻覚の症状が強いときなどに入院し、薬の調整などをする	1066	22万6885

施設数や利用者数は昨年7~10月時点。利用者数は認知症以外の人も含む総数で、精神科病院は昨年の1日平均の入院者数。厚生労働省の調査から

精神科への入院増加

精神病床の入院患者のうち認知症の割合が増えている



厚生労働省の調査から。11年は宮城県の一部と福島県を除く

厚生労働省によると、国内の高齢者(65歳以上)の約15%が認知症と推計され、その総数は2012年時点で約462万人にのぼる。65歳未満の若年性認知症も09年の調査で約3万8千人と推計されている。

一人暮らしや夫婦だけの高齢世帯が増え、自宅で介護を受けられずに介護施設や病院に入る人も多い。厚生労働省が10年時点で日常生活

に支障をきたす症状などがある認知症の高齢者の居場所を調べたところ、在宅の人と施設や病院にいる人がほぼ半々だった。認知症の人が自宅以外で暮らす場合、特養や老健などが多い。だが、興奮したり徘徊したりするなど症状が重い人は敬遠される例もある。そうした人も受け入れられているのが、精神科病院や一般病院の精神科だ。

これらに入院する認知症の人は11年に約5万3千人になり、15年前の約1.9倍に増えた。富士通総研が昨年、精神科病院に聞いた調査では、認知症の人が入院した理由(複数回答)は、「(興奮や徘徊など)行動・心理症状の悪化」が

「若年性」さらに狭き門

申し込もうと電話したが、症状を話す2カ所から断られた。もう1カ所は申し込みを受け付けたが、その後の連絡は来ないままだ。入院は4年に及び、ようやく昨年10月、病院から紹介されて特養に移った。体力が落ちて車いすから自力で立ち上がれないぐらいになっていたので、すんなりと入居が認められたのだ。

要介護度は入院時の「2」から、最も重い「5」になった。「ここまで(体の機能)落ちないと、行き場がなかったのかな」。妻は複雑な思いを抱える。

いまの特養は入居者が少人数で家庭的な雰囲気だ。病院では風呂は決められた時間に順番に入ったが、ここは1人ずつ様子を見て入れてくれる。「人間的に過ごせる。元気がうちに受け入れてくれる施設があればよかった」と妻はいう。実は、夫を精神科に入院

させ前、介護施設に日中入るデイサービスを試した。だが、まわりは70、80歳ばかりで、ボールを使った遊びをしたり、みんなで重謡を歌ったり。まだ60歳ぐらいだった夫はなじめず、二度と行かなかった。

若年性認知症の人が運動やボランティアをできる場があれば、夫の生きがいになる。自分も仕事や息抜きができるので、もう少し自宅でも介護できたかもしれない。妻はそう考えている。

「夫は病院のほかに行くところがなかった。若年性認知症の人の行き場をつくってほしい。本当にそう思います」(生田大介)